

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

1 + 1 + 1 = 無限大！
「食・農・観光」の連携で那須地域の美味しい魅力を発信します！

受賞者 **なすとらん倶楽部**
とちぎげんなすぐんなすまち
 (栃木県那須郡那須町)

■ 地域の沿革と概要

那須町は東京の北方約170kmに位置し、総面積は372km²、人口は26,082人（平成28年3月現在）である。栃木県の最北部で福島県との県境に接している。町の北西部には那須岳をはじめとする那須連山、南東部には八溝の山並みが広がっており、那須岳を源とした那珂川が町の南西部を流れ、那須塩原市との境をなしている。那須連山の麓に広がる那須高原は県内有数の酪農地帯であり、観光地としても知られている。

鉄道はJR宇都宮線、東北新幹線が並行して通り、高速道路については町内に東北自動車道の2つのインターチェンジを有する。新幹線にて首都圏まで約1時間、高速道路では1時間半と、観光地でありながら首都圏からのアクセスに優れている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

鉄道はJR宇都宮線、東北新幹線が並行して通り、高速道路については町内に東北自動車道の2つのインターチェンジを有する。新幹線にて首都圏まで約1時間、高速道路では1時間半と、観光地でありながら首都圏からのアクセスに優れている。

第1表 地区の概要

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

那須町の旧那須村は、那須岳の南山麓に広がる那須高原から東北自動車道や国道4号線東側の平坦部に及ぶ栃木県最北端の一角である。

那須温泉郷や那須御用邸が知られ、レジャー施設等も充実している首都圏から日帰り可能な観光リゾート地である。東北自動車道那須インターチェンジに接する那須街道（県道17号線）が那須高原内の各観光施

事 項	内 容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
地区の性格	機能的な集団等	
農 家 率 (内訳)		14.8%
	総世帯数	8,662戸
	総農家数	1,278戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	195戸
	1種兼業農家	206戸
	2種兼業農家	642戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	37,231ha
	耕地面積	4,714ha
	田	3,101ha
	畑	667ha
	草地	850ha
	耕地率	12.7%
	農家一戸当たり耕地面積	3.7ha

設へのメインアクセスルートとなっている。

戦後に多くの開拓団の入植により開拓された那須岳山麓の高原は、冷涼な気候と傾斜地を利用して一大酪農地帯となった。リゾート環境の中では観光牧場の経営展開も見られている。高原から南東方向にかけて水田地帯が広がり良質米や那須ブランド野菜、和牛の生産が盛んに展開されている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりを推進するに至った動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

那須連山の南斜面からは1,400年の歴史を持つ温泉が湧き出しており、那須温泉郷として知られる那須高原は、別荘地やレジャー施設も進出した一大リゾート地へ成長していった。その一方では入植者たちが切り拓いた原野と高冷地では、酪農への取組が広がっていった。また、酪農に加え、高原野菜等の生産も盛んになり、農畜産業も地域の主要産業の一つへと発展していった。

こうして良質な農畜産物を豊富に生産供給する産地と、観光リゾート地を併せ持つ地域が形成されたものの、「農業」と「観光業」は手を取り合うことなく、地元住民の間では相互理解や連携が十分に図られてなかった。その後バブル崩壊等の不景気の波を受け、客足が遠のいたために観光業は大打撃を受けた。京浜市場への出荷を生業としていた農業者は大きな影響は受けなかったものの、地域が活気を失っていくのを感じていた。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

そのような中、行動に移したのは農村の女性たちであった。農村生活研究グループの女性たちは、季節ごとに広場で開催していた“フレッシュ市”を町の支援を受けながら常設の農産物直売所へと進化させた。また、地元食材の加工にもチャレンジし、地元の農産物をふんだんに活用したスープ「な・す〜ぷ」を開発した。さらに、農村生活研究グループの枠を越え、観光業や飲食業などの方々と連携の上、「おいしい那須暦」を作成した。「できることから」をモットーに、小規模な地域活性化に励んでいる農村生活研究グループだったが、観光業や飲食業の方々が発する農業とは異なる意見・視点に新鮮さや感動、楽しさを覚えた。

そうした動きの中、国土交通省が行う「食文化を核とした観光的な魅力度向上による地域活性化調査」のモデルとして食文化フォーラムが開催されることになり、フォーラムの実行委員会の構成員に農村の女性や観光業者、飲食業経営者等の業種からそれぞれ選ばれた。フォーラム中に「な・す〜ぷ」の開発や「おいしい那須暦」が話題に出されたことにより、地域全体で「食と農と観光の連携」への期待が一気に高まった。

フォーラムの成功とともに実行委員会は解散となったが、「もっと何かできるはずだ。これで終わらせるのはもったいない。食で地域を元気にしよう。」と声を上げた農業者、観光業者、シェフの会、商工会、マスメディア等の関係者が、那須地域の「食・農・観光」の連携による魅力度向上と地域の活性化を共通の理念として、平成18年4月に「なすとらん倶楽部」（以下、「倶楽部」と表記する。）を発足させた。

ウ 現在に至るまでの経過

開発した「な・す〜ぷ」を実体化させるため、倶楽部のメンバーが中心となって運営組合を設立し、平成19年8月に道の駅那須高原友愛の森の中に“那須の食レストラン「なすとらん」”を開店した。現在はこの「なすとらん」が倶楽部の活動拠点となっている。現在、倶楽部はいくつかの部門に分けられ、事業展開を行っており、地域活性化に必須な「情報の拠点」「食と農の拠点」「出会い・交流の拠点」としての役割を担うことになった。

- ・情報の拠点：「おいしい那須暦」の作成等により、農業・観光業・飲食業に関する那須の魅力地域内外に情報を発信している。
- ・食と農の拠点：“那須の食レストラン「なすとらん」”の運営や「那須の内弁当（なすべん）」の開発などにより、消費者や生産者、シェフの橋渡しを図っている。
- ・出会い・交流の拠点：「わいわい会議」「なすとらん会議」「わいわいフェア」の開催、グリーンツーリズム活動である「おいしいツーリズム」の実施等により地域の農業者、観光業者、飲食業者等の異業種による人材交流。

現在、倶楽部は設立10周年を迎え、これまでの食・農・観光に焦点を当てた取組に加え、食や農に携わる「人」に焦点をあて、「人」と「農村資源」を組



写真1 わいわい会議

み合わせたグリーンツーリズムの取組を進めている。さらに、組織の発展を推進するため、リーダーの世代交代も進められている。

(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

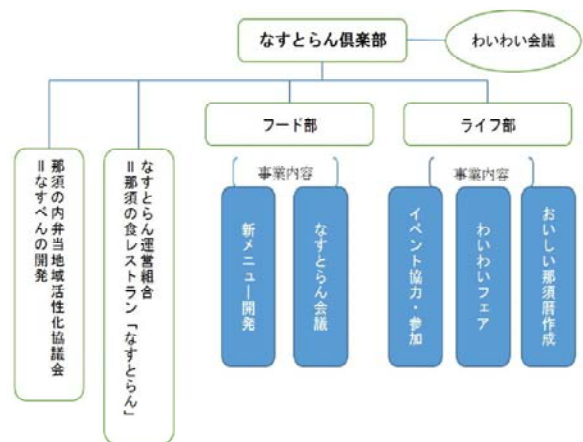
「なすとらん倶楽部」

○設立：平成18年4月

○会員：会員91名（平成28年2月現在）

構成割合：農業者50%、観光事業関係者40%、行政機関等関係者10%

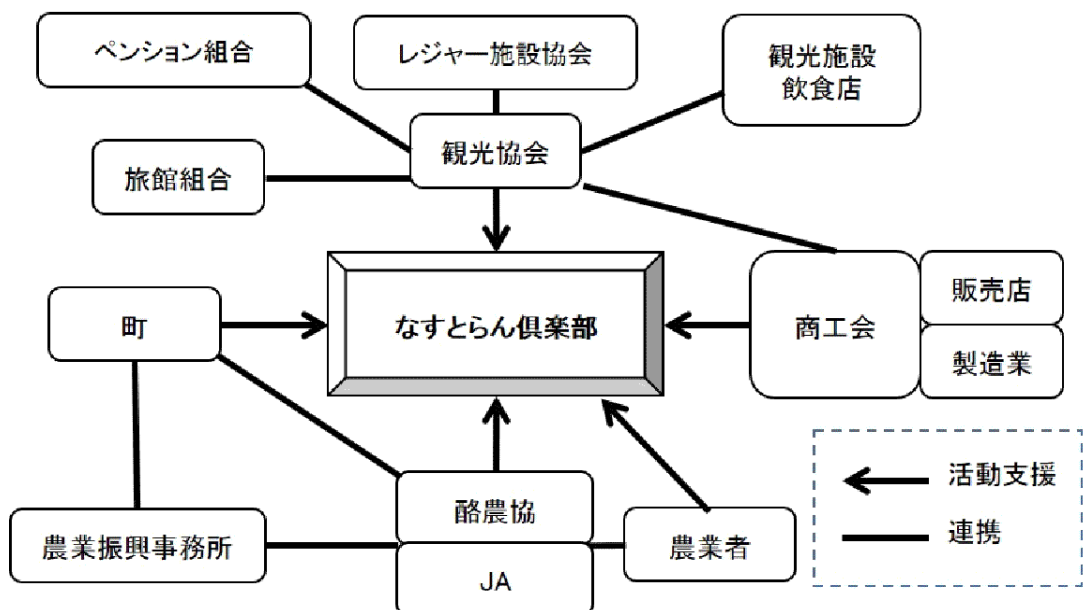
第2図 体制図



イ 連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

- 地域活性化協議：観光協会、JA、酪農協、商工会、旅館組合、民宿組合、レジャー施設協議会等
- イベント協力：道の駅（那須未来（株））、観光協会、那須フィルムコミッション、那須高原ミルク街道推進協議会等
- 情報収集：食による観光まちづくり推進協議会（S-1パートナーズ）等
- 指導・支援：町、農業委員会、県（農業振興事務所）、栃木県農業振興公社、とちぎ農産物マーケティング協会

第3図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

倶楽部は、農や食、観光といった地域資源のみならず、様々な職種の人的資源も見事に連携させており、観光と農業の連携による新たな農村ビジネスが展開され、豊かなむらづくりの取組が実現している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

ア 農村レストラン「なすとらん」の事業展開（食と農の拠点）

「な・す〜ぷ」をはじめ、地域農産物を活用した新メニューの構想を実現化するため、倶楽部の事業に農村レストランの運営を取り入れ、平成19年、「道の駅那須高原友愛の森」内の既存施設を活用し那須の食レストラン“なすとらん”（以下「なすとらん」と表記する。）をオープンさせた。農村の女性たちが中心となって運営している。また、食情報の発信をテーマとするレストランとするため、那須和牛ステーキや那須高原野菜カレーなど、地域農産物を利用した郷土色豊かな食の提供を行っている。

なすとらん運営の中で非会員の農業者からも農産物の積極的な売り込みが図られるようになり、なすとらんは単なる農村レストランにとどまらず、農業者、シェフ及び消費者の方々の意見を活発に交換し合う場となっていった。

イ ふれあいの郷直売所の利用拡大

ふれあいの郷直売所は、道の駅那須高原友愛の森の敷地内でなすとらんと隣接しており、なすとらん利用者から、なすとらんで使用されている農産物を購入したいという要望に応えるため、那須高原の夏秋いちごやチーズ等の乳製品の販売も行うようになった。その結果、地域住民や観光客の需要だけでなく、ペンション、洋菓子店等の業務需要にも対応するようになり、農業者は販路の拡大を図ることができている。それ以上に生産者自身が消費者の声に接する機会が増えたことで生産意欲を高めることにつながっている。

(2) 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備

ア 地産地消の取組（食と農の拠点）

那須地域で生産されているねぎやうどは、JAによるブランド販売戦略によって「那須の白美人ねぎ」、^{はくびじん}「那須の春香うど」といった商品名で販売されている。JA集荷により生産量のほとんどが京浜市場へ出荷されており、地域のホテルやレストランでは、自慢のブランド野菜をメニューに取り入れたくとも叶わず、地産地消の取組はなかなか進まなかった。

そこで、平成21年、倶楽部は「那須の内弁当地域活性化協議会」を設立し、那須地域自慢の農産物をたくさんの人に味わってもらおうと那須のお米、那須のにら、那須の白美人ねぎ、那須和牛、那須の美なす（または那須の春香うど）、那須の旬の高原野菜、那須の食材（な・す〜ぶ）、那須のフルーツ、那須の牛乳の9つの地元食材をそれぞれ9つの料理にして、八溝杉の盆にのせたランチプレート「那須の内弁当（通称なすべん）」を開発した。平成22年には、なすとらんを含む7つのレストランやホテルで提供し、今後一層の農産物の安定供給を図るため、「那須の白美人ねぎ」や「那須の^{はるか}春香うど」の取引契約を「JAなすの」と結び、ブランド野菜を地元で味わえる体制を整えた。平成21年の販売開始以来、平成28年3月までに19万食が提供され、地域への経済効果は約10億円と試算されている。現在は9店舗でなすべんが提供されており、なすべんの知名度向上により、商標登録間もなかった那須和牛をはじめ、那須地域の農産物の知名度についても同時に向上させることができ、那須ブランド農産物の利用拡大とPRに大きく貢献することができた。



写真2 9店舗のなすべん

イ 農業の6次産業化等による新たな商品開発の取組

倶楽部の取組に触発されて地域の中から新たな食資源を造り出そうとする動きも芽生えている。那須高原の生乳を使ったチーズの研究開発がにわかに活気づき全国コンクールで入賞する商品も生まれ、なすべんをはじめとして地域のレストランでの利用も広まっている。今後、那須産の小麦を使ったパン加工へのチャレンジなどを期待する声も高まっている。

(3) 構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等について

ア 後継者の育成（出会い・交流の拠点）

倶楽部が行う事業には、月に1度の「わいわい会議」や、会員、一般客、シェフ等で行う「なすとらん会議」等があり、幅広い人材が交流する場として、農業後継者のみならず、地域コミュニティを主導する後継者やリーダーの発掘・育成の場としての機能も有している。

農業者にとっては多様な他産業の人材と交流することができるため、創造力の発揮や企業感覚に富む農業経営を身につけることができるとともに、他地域から移住してきた者にとっては同業、異業問わず仲間を見つけることができる場となっている。倶楽部の活動をきっかけとした出会いにより新たな事業を展開する会員も多い。



写真3 なすとらん会議

イ 女性の活躍

倶楽部には、さまざまな職種の人材で構成されており、女性、男性、地域住民、移住者問わず各組織に適した人材が配置されている。なすとらんの運営では、女性や高齢者が働きやすいシフト管理や、スタッフが意見を出しやすい環境の場を提供するなど、メニューの開発や店舗づくりに女性の知識と経験が活かされている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等の生活・環境整備面の取組状況

ア 食農教育の実践（情報の拠点）

那須町にある「食資源」を分かりやすくカレンダーにまとめた「おいしい那須暦」は、地元の小中学生とともに、倶楽部の創設時から継続して10年間作成された。「おいしい那須暦」の作成により倶楽部員と地元の小中学生との交流を深め、那須地域の農畜産物や郷土の歴史・風習について学ぶ機会をつくるとともに郷土愛の醸成にも貢献している。



写真4 おいしい那須暦づくり

さらに、食・農・観光のすべてを含んだ那須地域の食資源をカレンダー化したことにより、地域内外に効率的かつ効果的に情報発信することができ、「情報の拠点」としての役割を果たしている。

イ 東日本大震災への対応

東日本大震災による福島第一原子力発電所事故の影響を受け風評被害

にさらされた那須地域の復興のため、町や観光協会等と連携してPRイベント「那須の食キャラバン」において、なすべんの出張版である「こなすべん」を販売し、地域住民の先頭に立って首都圏に出向き、農産物の安全性や観光のPRを行った。

(2) 生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流

ア 地域コミュニティの強化とグリーンツーリズムの取組（出会い・交流の拠点）

倶楽部の会員と消費者の交流を目的とし、なすとらんを会場にして毎年“わいわいフェア”を実施している。地域の食に関する体験を楽しむだけでなく、地域の中で創作活動に取り組むグループの作品紹介や工芸体験も取り入れて、地域コミュニティの強化はもとより都市住民との交流も年々盛んになっている。



写真5 わいわいフェア

また、グリーンツーリズム活動として、那須の食をテーマに、「学ぶ、出会う、体験する、食べる、思い出を持ち帰る」を楽しんでもらう「おいしいツーリズム」（寒ざらし体験等）の企画も始めている。



写真6 寒ざらし体験

イ 観光協会等と連携した交流活動

これまでも観光協会が主催する那須高原ウォークラリーや旅館組合が主催する開湯記念クーポン等の交流イベントに協力し、なすべんを中心とする食情報の発信をとおして地域の活性化を促進してきた。最近では広く知られるようになったサイクルイベント「那須高原ロングライド」でのエイドステーションへの提供、「那須国際短編映画祭（那須ショートフィルムフェスティバル）」や「那須おんせん朝市」の運営協力など、誘客効果の高いイベントにおいて地域と一体となって都市住民の受入体制づくりやにぎわいづくり、リピーターの確保を図っている。

(3) 地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

地域住民を広く取り込む倶楽部の様々な活動は、新たに那須でペンションやレストラン等を事業展開する都会からの移住者が地域に根付くきっかけ作りに役立っており、倶楽部の交流をとおして那須に溶け込み、農村の魅力を見出した移住者が地域のリーダーとして活躍する事例も出てきている。倶楽部が食のレストランを手がけたことで女性の社会参画に拍車がかかり、各種団体や組織において主要ポストを女性が担っている。